

# センターの沿革

1984年末に附属サル類保健飼育管理施設15周年記念誌を刊行したので、本巻においてはそれ以降の施設における主な出来事の概要を記す。

教官の海外出張は件数が大幅に増えたため、この記録からは割愛し、技官の海外出張だけを記す。非常勤職員の採用および退職については、全体の記録は別に一覧表としてまとめるので、ここでは特に施設の動きに関連した部分だけを抜き出して記す。

15周年記念誌入手の問い合わせは、センター事務局（電話：0568-63-0587）へ。

## 1985（昭和60）年

- 1月 ・パリ自然史博物館附属動物園より、動物交換（ニホンザル長瀨群♂3頭♀7頭と交換）にてオランウータン♂（名前 ドウドウ、5歳）とチンパンジー♀（名前 クロエ、4歳）が導入される。Bernadett M. Bresard 博士が随行来所（3週間）。
- 10月 ・施設棟第4ケージ室からアカゲザルオスが脱出し、研究所正門付近を歩いているところが目撃される。搜索の結果、正門下の民家の屋根に上がっているのを発見し、麻酔銃で捕獲。対策として第3，4ケージ室に金網製の前室を作り、廊下に出るまでのバリアを二重にした。
  - ・サル類保健飼育管理施設の組織転換として、霊長類繁殖資料センター構想を立案する。
- 12月～ ・拡大サル委員会において、ガイドライン策定のための検討が始まる。

## 1986（昭和61）年

- 2月 ・長谷川正衣技官退職。後任は第6次定員削減により不補充となり、飼育担当非常勤職員として本多ヤス子を採用。飼育総頭数約800頭規模となる。
- 2月 ・竹中施設長の任期満了に伴い、松林助教授が施設長に選出される。
- 2～3月 ・招聘外国人研究員が研究所のサルの実験方法などに関する告発をヨーロッパの雑誌に寄稿、在外日本大使館などに抗議が寄せられ、文部省から調査が行われる。
- 3月 ・技能補佐員小形敬太郎退職。調理業務後任に高橋技官を当てる。
- 4月 ・動物飼育・実験に関する日本で最初のガイドライン「サル類の飼育管理および使用に関する指針」が作られる。これに伴い、指針で規定されたサイズに満たない個室ケージの大部分が処分され、新規格のケージに交換された。

## 1988（昭和63）年

- 3月 ・松林助教授 施設長に再任。
- 6月 ・ピーク時サル総頭数が始めて900頭を越える。
- 6～7月 ・三輪宣勝技官がマレーシアサバ州のオランウータンリハビリセンターへ出張。
- 12月 ・維持経費圧迫のため、サル頭数約100頭の削減を協議員会で承認。

## 1989（平成1）年

- 10月 ・チンパンジー（アキラ、アイ）脱走事件起きる（3日）。アイは当日、アキラは翌日捕獲。松林施設長は海外出張中で、施設長代理の竹中教授が指揮を執る。

## 1990（平成2）年

- 1月 ・オランウータン“ドウドゥ”、心不全で急死。
- 2月 ・事務補佐員に梅田恵子を採用。  
・次期施設長に小嶋祥三教授を選出。
- 7月 ・名古屋で国際霊長類学会開催。出席したB.ブレザール博士（フランス）が来所し、本棟地下飼育室にいるチンパンジー「クロエ」の飼育環境改善を要求。この後、B.バルドー財団や国際霊長類保護連盟（IPPL）も霊長類研究所の地下飼育室に飼育されているクロエとテナガザルの飼育環境改善キャンペーンを展開し、研究所に数十通の抗議文が寄せられた。
- 10月 ・前年のチンプ脱走事件から一年経ち、サル脱走時の訓練（無線機、麻酔銃の操作訓練など）を行う。サル脱走に対応するマニュアルを作成。

## 1991（平成3）年

- 1～3月 ・熊崎技官、ギニア国ボッソウでの野生チンパンジー調査 参加。
- 3月 ・第一放飼場の改修工事（営繕）完工。土砂流出防止のため、場内を雛壇型に造成する。
- 4月 ・所内措置として技官定員1名がサル施設に配分され、前田典彦を採用。
- 10～11月 ・三輪技官、ギニア国ボッソウでの野生チンパンジー調査に参加。  
・サル施設を改組、拡充するセンター化構想を計画。

## 1992（平成4）年

- ・第2放飼場にチンパンジー用居室およびテスト室増築。
- ・セキュリティの強化：サル類遠隔監視システムが予算化され、放飼場を中心としたTVカメラによる監視・録画が可能となる。飼育室の鍵を更新し、第2放飼場そばに水銀灯増設とアラームライト設置。チンパンジー区域では電気錠とコンピュータを組み合わせた入退舎管理システムを設置。通路に赤外線警報装置を設け、チンパンジー放飼場周囲塀に高圧電柵を取り付ける。
- ・サルの所外供給の実施案を作り、所内での検討開始。
- ・センター化構想を更に練り上げ、休日のケアを含む所内サル飼育の一元化、繁殖コロニーの所外移転、ウイルス検査機能の整備などを検討する。

## 1993（平成5）年

- 2月 ・一連の破壊工作およびサル逃がし未遂事件発生（2日）。研究所正門の金属プレートがこわされた。第2放飼場の入り口扉およびヤクシマザルの居室ドアの南京錠がこわされて開けられていたが、サルは居室内に留まっていた。また、本棟地下第4飼育室（ニホンザルとキャプチンを飼育）のグループケージと入

り口ドアのスライドが開けられ、切ったリングなどを廊下に置いて南側のディープフリーザー室（温風対策のため戸は開け放し）まで誘導してあったが、サルは居室内に留まっていた。警察に被害届を出し、捜査が行われた。

- 11月
- ・第一放飼場の間仕切りおよび捕獲室新設工事完了。群管理や捕獲作業が容易に行えるようになった。捕獲室屋上は屋根を備えた観察台になり、雨天や炎天下での観察が楽になった。
  - ・類人猿行動実験研究棟の工事が始まる。この工事のため、本棟地下飼育室の一部および第3放飼場の一区画を取り壊して新しい建築物を造ることになり、多数のサルを一時、別の場所に仮移転させて数ヶ月間飼育した。

#### 1994（平成6）年

- 5月
- ・JICA 受託研究員として、ケニア霊長類研究所コロニーマネージャー、Lawrence Sirengo 氏が、寄生虫検査、血液検査、臨床繁殖、コンピュータでの個体管理などの技術研修を行った（95年1月まで）。
  - ・類人猿行動実験研究棟完成。チンパンジーの放飼場に附属して、金網屋根のついた小運動場が作られ、休日でも屋外で運動できる条件ができた。両方の放飼場には樹木が植えられ、流れが引かれ、また丸太・ロープなどで三次元的な空間利用の構造が作られて、飼育の質的向上が飛躍的に前進した。また、これまで本棟地下北側の飼育室に飼育されていたマカクなども、新しい建物に移って採光や通風などの飼育環境が大幅に改善された。
  - ・飼育一元化に向けて所内での討議を重ね、次年度からの実施が決定した。
- 3月
- ・臨時用務員 古賀ツタエ、定年退職。

#### 1995（平成7）年

- 4月
- ・所内全サルの飼育一元化スタート。目的は、1）部門に配分した実験用サルも同一の条件で飼育し、動物福祉上の配慮を同レベルで行う、2）休日の飼育も一元的に行うことで、健康管理上の見落としを防ぐ、3）一元化することで、サル管理に関する責任をサル施設に集中し、指揮系統を分かりやすくする、などである。合わせて、休日もケージ室の清掃を行うこととした。これには飼育要員の増が不可欠であったが、前年度末に退職した総長発令非常勤職員の人件費を充てることで可能になった。新しく雇用された飼育担当非常勤職員は遠藤葉子、小嶋園子、長谷川洋子。
  - ・施設の改組（実験動物センターへの転換）が研究所概算要求重点事項の中に取り入れられる。内容の柱は、1）教官、技官の定員増、2）飼育外部委託費の措置、3）施設棟建物未完成部分の増築、である。

#### 1996（平成8）年

- 1月
- ・元日朝、第2放飼場グループケージの鉄格子が数本、何者かによって切断され、ヤクシマザル6頭が外に出ているのが発見された。大部分は自発的にケージに戻り、近くで発見された残りのサルは麻酔銃等で捕獲して全て当日中に連れ戻

した。隣接するアカゲザルの放飼場内には、切り倒した孟宗竹数本が観察台から吊り下げられ、イモなどが置かれていたが、サルは脱出はなかった。警察に被害届を出し、放飼場塀の高圧電気柵や監視カメラの増設を行う。

- 2月・COE招聘外国人として、上海動物園高級工師朱本仁氏が着任、臨床繁殖研究を実施（8月末まで）。
- 3月・高橋末年技官が定年退職。後任調理室担当に阿部技官を当てる。次期施設長に景山助教授選出。
- 4月・サル類の診断・治療を主務とする技官として獣医師勝田ちひろを採用。
- 5月・国立大学動物実験施設協議会（国動協）の幹事校に選出される。同協議会のイヌ・ネコ・サル問題対策小委員会の委員長に松林助教授が選任される。
- 9月・サル用固形飼料の成分を変更し、栄養価は維持して低コスト化を図る。  
・Bウイルス抗体検査をはじめて実施。
- 12月・年末年始休暇中の夜間警備委託費が予算化され、警備会社による巡回警備を実施。  
・サル用汚水処理槽の保守管理が業者委託された。

#### 1997（平成9）年

- 3月・第2放飼場A区画の全面改修が行われ、土留め、植樹、丸太止まり木、日除け小屋、保温ボックス、小川などが作られた。  
・熊崎技官、アメリカ霊長類研究施設の動物福祉を視察。
- 8月・ケニア国立霊長類研究所のSammuel Kago氏が2週間の研修を行った。
- 10月・勝田技官、アメリカの動物福祉状況を視察。
- 11月・Bウイルスフリー群であった若桜群に加えて、新たにニホンザル（嵐山群）1群、アカゲザル（インド群）1群のBフリーコロニーの分離・育成を開始。
- 12月・施設創設以来飼育したサル全個体の生年月日、性、体重などの電子データを「サル類基礎データ集」として公開。  
・チンパンジー“アイ”の人工授精に成功し、受胎。

#### 1998（平成10）年

- 3月・次期施設長に景山助教授再選。
- 5月・日本生物化学センター野村孝弘氏が1週間の研修。
- 6月・附属施設経費が6.3%の削減。本部および所内での救済措置を受ける。  
・筑波医学実験用霊長類センターよりリスザル4頭導入。  
・アジルテナガザルが出産（個体名ツヨシ、オス）
- 8月・チンパンジー“アイ”オスの子を死産。
- 12月・サル施設を転換して「人類進化モデル研究センター」を設置する概算要求が認められる（内定）。教官定員が増員され、教授3（うち1名は外国人客員）、助教授3（うち1名は遺伝子情報分野助教授と兼任）、助手1となる。

## 1999（平成11年）

- 3月 ・非常勤職員（獣医師）加藤朗野採用。
- 4月 ・新しく人類進化モデル研究センターがスタート。景山施設長がセンター長事務代理となる。
  - ・マイケル・ハフマン氏が行動形成領域客員教授に発令される。
- 6月 ・創出育成領域、松林清明教授を発令。
  - ・育成舎グループケージのアカゲザルメス1頭が脱走（29日夕）。担当飼育員の出入りの隙に廊下に出たと思われ、調理室入り口のガラス戸に体当たりして破る。翌早朝、西側民家屋根上で発見、麻酔銃捕獲。
  - ・アジルテナガザル出産（個体名ラジャ、メス）。
- 7月 ・健康統御領域、景山節教授を発令。
- 8月 ・橋本（旧姓・勝田）技官の育児休業中、加藤朗野を技官に採用（1年間）。
- 10月 ・初代センター長に松林教授が選任される。
- 12月 ・マダガスカル、チンバザザ動植物園の Marie Claudine Ranoroosa が研修を行う。

## 2000（平成12）年

- 1月 ・創出育成領域、平井助教授を発令（遺伝子情報分野助教授併任）。生命倫理領域、上野吉一助教授を発令。
- 3月 ・センター各教官の研究室、実験室、準備室などを設けるため、本棟の一部の部屋の配置換えと改装工事が行われる。
  - ・先導的設備機器要求（代表：茂原教授）が認められ、センターの研究に不可欠な分析装置が導入された。
  - ・科研費特定領域研究「総合脳」の支援を受け、リソースステーション計画のためのサルコロニー設備の設計、試作実験を行った。
  - ・センター化に伴って事務量が大幅に増加したため、事務補佐員に前田真理子を採用。
  - ・チンパンジー3頭（アイ、クロエ、パン）が妊娠。アイ、パンの2頭はセンターが実施した人工授精による。
- 4月 ・福原亮史がセンター（実験動物科学分科）に初めての大学院生として入学。
  - ・COE非常勤研究員に成田裕一を採用。
  - ・技術補佐員に小笠原麻美を採用。
  - ・チンパンジーアイの子（アユム）生まれる。
- 6月 ・　　　　クロエの子（クレオ）生まれる。
- 8月 ・　　　　パンの子（パル）生まれる。
  - ・橋本ちひろ、技官に復帰。加藤朗野、教務補佐員となる。
- 10月 ・第2放飼場のアカゲザルメス1頭が脱出（31日午後）。コンクリート塀の打設型枠の跡穴などを伝って登ったと推測。隣接する日本モンキーセンター敷地内の樹上にいるのを発見、職員で取り囲もうとしたところ、木から飛び降りて自発的に放飼場内に戻る。コンクリート穴などをモルタルで塞ぐ。

2001（平成13）年

- 4月 ・ 檜垣小百合が研究生（センター）として入所。
- 5月 ・ 林原自然科学博物館類人猿研究センター獣医師洲鎌圭子が短期研修。
- 11月 ・ 獣医技官勝田ちひろ退職。後任に加藤朗野を採用。

2002（平成14）年

- 3月 ・ サル類保健飼育管理施設30周年（兼・進化モデルセンター創設）記念誌「新しいサル像をめざして」発刊。

（文責：松林清明、京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター）